

## 口腔ケアが高齢者の要介護リスクに与える影響：大崎コホート 2006 研究

Impact of oral self-care on incident functional disability in elderly Japanese: the Ohsaki Cohort 2006 study

2017 年 BMJ Open 発表

### 残存歯数が少なくても口腔ケア（歯みがきなど）を行っている人では要介護状態になるリスクが上昇しない

先行研究によって残存歯数が少ない人では要介護発生リスクが上昇することが報告されており、歯を失ってしまった人の要介護発生リスクをいかに減少させるかが大きな課題となっています。我々の研究室でも、残存歯数が少なくても口腔ケアを行っている人では死亡リスクが上昇しなかったことを報告しましたが(<http://www.pbhealth.med.tohoku.ac.jp/node/544>)、歯科通院・歯みがき・入れ歯の使用等の口腔ケアを行うことによって要介護発生リスクも減少できることが期待されています。しかし、その関連を検証した研究報告は少なく根拠は不十分でした。本研究は、残存歯数が少ない者における口腔ケアと要介護発生リスクとの関連を前向きコホート研究で検証したもので、残存歯数が少なくても口腔ケア（特に歯みがき）を行っている人では要介護発生リスクが上昇しないことが示されました(図)。

### 研究のデータについて

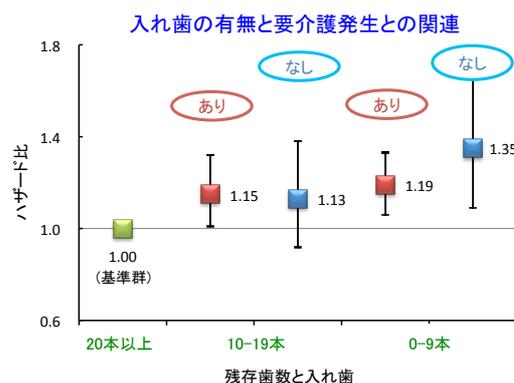
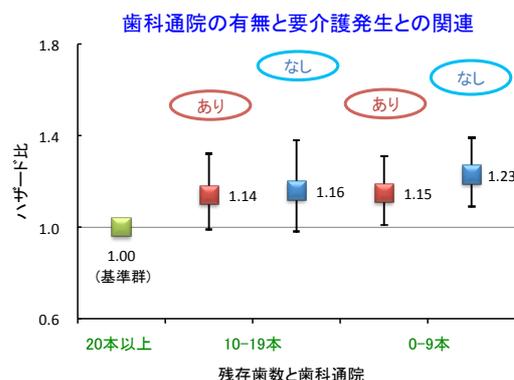
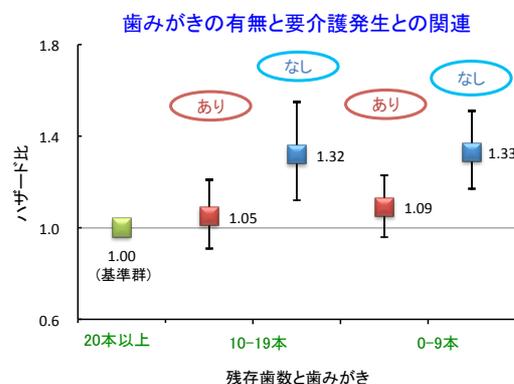
本研究の分析は 2006 年の 12 月に実施した大崎市民健康調査を用いて行いました。大崎市民健康調査は 65 歳以上（当時）の住民 31,694 人を対象にアンケート調査を実施し、23,091 人から有効回答を得ました。本研究ではこのうち、要介護認定の情報提供に非同意の者、ベースライン時に要介護認定を受けていた者、歯科保健に関する質問項目に回答が無かった者等を除いた 12,370 人について分析を行いました。

### 残存歯数や口腔ケアの状況について

残存歯数や口腔ケアの状況はアンケートの回答から得ました。残存歯数は「ぜんぶある(28本)」、「ほとんどある(25~27本)」、「だいたいある(20~24本)」、「半分くらいある(10~19本)」、「ほとんどない(1~9本)」、「まったくない(0本)」の中から選択してもらいました。また口腔ケアの状況については、歯みがきは一日何回行うか、歯科通院は過去1年以内に歯医者に通ったことがあるか、入れ歯は使用しているかを調査し、一日2回以上歯をみがく者、1年以内に歯科通院がある者、入れ歯を使用している者をそれぞれ「口腔ケアあり」と定義しました。最終的に残存歯数と口腔ケアの状況を「20本以上(基準群)」、「10~19本かつ口腔ケアなし」、「10~19本かつ口腔ケアあり」、「0~9本かつ口腔ケアなし」、「0~9本かつ口腔ケアあり」の5群に分類し、各々の口腔ケアについて各群の要介護発生のハザード比と95%信頼区間をCox比例ハザードモデルで推定しました。

### 他のリスク要因の影響について

残存歯数が多い人や口腔ケアを行っている人では、年齢が若かったり、疾患の既往が少なかったり、生活習慣が良かったりする可能性も考えられます。そのため、この研究では、残存歯数や口腔ケアと要介護発生に関連すると考えられる要因の影響を考慮したデータ解析をしています。具体的には、性、年齢、学歴、既往歴、喫煙、飲



---

酒、体格、歩行時間、心理的ストレス、食物摂取量の各要因について、5群間での偏りがなくなるように統計学的な処理を行いました。

#### **研究の特徴と限界について**

この研究の結果は、一般住民を対象とした大規模調査に基づいて様々な要因の影響を考慮した解析手法から得られたものです。ただし、この研究では、(1) 残存歯数や口腔ケアの状況は自記式質問紙により調査されたこと、(2) 要介護発生に至った原因が不明なのでメカニズムが明確でないこと等の限界もあります。

---